

一、松原素庵の虚言
 松原素庵は、大坂浪人にて無比類うそつき也。夏陣の四月二十九日、塙團右衛門と住、江へ出て大成る働ありと偽り、保科肥後守殿へ取入申ければ、肥後殿信に思召、百人扶持に被召出。其後其子は筑前守殿御代に五百石給ふ。是は生駒八郎右衛門と申合、相互に擧合、八郎右衛門事を大成る働も有之様に肥後殿へ申上げ、肥後殿より御家へ被仰遣、前の通り千石被下候。八郎右衛門は五月六日未明に大坂を遁出て、御家の陣小屋へ來り隠れ居たるを、鎚に見て逢ひたる者あり。是と云合たる素庵なれば、見も聞もせぬ事ながら偽るものとおもふ。

一、笹島三藏家來權兵衛の妻

笹島第二代豊前は津田遠江女の子也。其弟覺右衛門以下は、岡島備中女の子にて備中外孫也。依之家督は覺右衛門に可被仰付哉とて、名も先祖の三藏可然とて笹島三藏と云ふ。家老權兵衛といふもの石^{百五十}跡目は三藏へ可被下と思ひ、惣領の豊前へ常々慮外に當る。父豊前死後に、微妙公惣領に二千石被下豊前といひ、三藏へ五百石被下。權兵衛常々の儀

委細達御聽、豊前に被下候間仕度様に可申付と被仰出。一門寄合談合し、小姓兩人に申付殺害に相極る。兩人權兵衛宅へ行向ふ。權兵衛豫て覺悟しける故に、兩人來ると大脇指を取て座敷へ出んとす。妻見て云様は、そなたは不心得成人かな。狭き座敷へ大脇指は悪からん、是をとて中脇指を出す。權兵衛尤とて其を指て出たり。妻は白手拭にて鉢巻し、右の大脇指を抜て提げ、權兵衛に推つゞき出けるを、座敷に居ける兩人、暖簾の蔭より婦人の影見え透て、其冷敷事身の毛よだち、二人ともおくれて働事あたはず、徒に歸りたり。前代未聞の儀と金澤中の取沙汰也。其後權兵衛は切腹しぬ。妻は誰やらん聞及て呼迎へ妻とし、子も生たり。

一、高德公末森御出陣の初秀句

末森へ成政攻來る時、注進の飛脚九月十日巳の刻頃なり。高德公早速御出で、其時の御厩は御式臺の向にあり。御馬の拵おそしと被仰、御式臺に御立候處へ、御臺所の賄奉行澤崎宗仁黒米を折敷に盛り、輕節を上にて置て、目出度追付御歸陣と申上る。公御快く輕を少し御口に入れられ、米を御取、是は黒米也、かつて食んと仰られけり。

一、寺西宗與の沈着

高德公御夜話、大形は武道の御物語又は鷹野ばなし也。御相手は村井豊後守・篠原出羽守・寺西宗與・江守平左衛門、其外彼此罷出で御夜話を承る。長圍爐裏に燃火を被仰付、何も火にあたりて咄せり。其内宗與はいつも參ると其儘、先づ火箸を取て灰をせゝる。公常に綺麗すき被成、灰を見事にならさせて置給ふ。宗與參れば灰をせゝるに付て、或時兒小姓衆へ被仰付、宗與毎の如く灰をせゝるべし。火箸を少しやきて置候へと被仰付、兒小姓衆其通に仕置。如案宗與參り火箸を取て少しも不構、いつもの通り灰をせゝり、暫くありて火箸を爐中に收め、立退り手を突て、扱も曲も無く御座候。此老人が心中を御ためし被遊候か。只今若し火箸を捨候はゞ面目を失ひ、於御前切腹仕外は有御座間敷候。扱も曲も無く御座候と涙を流し申ければ、公せがれ共めがわるい事をして置く。堪忍めされよと御笑に成て濟ぬ。

江守可入話。可入は平左衛門孫也。

一、岡田長門守攝津高屋にての先駈

信長公の時、攝津高屋にて寺西宗與大手より懸る。上々簀戸

あり、此内より鐵炮を打事如雨。宗與より先に奥村平六左衛門、少し脇へ矢道を除て伏て居る。宗與を見て、寺西か、それは矢道ぞ、此方へ來り給へ、能き時分に出し可申と云ふ。平六左衛門は宗與より年長武功も多きもの故に、奥村と一所に成りぬ。又跡より岡田長門守來る。平六左衛門又岡田長門か、それは矢道ぞ、爰へ來り給へ、能き時分に可出と云ふ。長門守云ふ。矢筋なりとも我等には當るまいとて、眞先に上簀戸の脇迄行たり。内より敵出て鎗を合す。是を見て宗與も平六左衛門もかけ付たれば、敵は城内へ入たり。兩人とも長州に超され口惜しと云ふ。其後奥村・寺西は御國へ來仕ふ。毎々宗與は奥村に向て、彼高屋にて其方にたふされ、長門にこされ口惜しといふ。

一、向臈より火出づるいふ事

蒲生家の浪人大塚自庵常に語ては、摺切の向臈よりは火出るといふ事はある事也。蒲生家に結解十郎兵衛といふもの大摺切也。向臈より青色なる火の度々出たるを見たるといふ。赤尾主水此事を聞て實とも不思。其後御國へ來り佐々木道求へ尋ぬ。道求は蒲生と一家ゆるに、自庵も結解も能